

神尾一郎が豊小学校において実践した “ふしづくりの音楽教育”に関する研究

Study on music education "Fushi-zukuri" Practiced by Ichiro Kamio in Toyo elementary school

(2012年3月31日受理)

太田正清
Masakiyo Ohta

Key words : “ふしづくりの音楽教育”, 山本弘, 神尾一郎, 児童の音楽能力の育成, 豊小学校

要 旨

“ふしづくりの音楽教育”とは、日本の音楽教師、山本弘¹⁾(小学校音楽科教育)、中村好明(幼稚園音楽教育)らが提唱したものである。山本弘の記述によれば、“ふしづくり”という名称を用いているが、「作曲技法を教えることが目的ではなく、生涯にわたって音楽を楽しむために必要な音楽能力を育てること」としている。

山本弘によると、“ふしづくりの音楽教育”を受けた児童は、全員「初見で歌い、楽器を奏で、指揮をし、作曲もし、(教師がいなくても)自分たちで授業まで行うようになった」とされる。当時の児童の様子は、他校から古川小学校に転勤してきた教師、藤田耕作の記録や山本弘の著作の中で描写されている。また、当時の授業の様子は、山本弘によって映像として保存されており、後に編集され、東京教育技術研究所からDVDの映像が販売され、現在でも視聴ができる。

岡山県に“ふしづくりの音楽教育”にとっても感銘を受けた音楽教師がいた。神尾一郎²⁾である。この研究では、神尾が岡山県岡山市立豊小学校において実践した“ふしづくりの音楽教育”について考察した。

1. “ふしづくりの音楽教育”

山本弘は、岐阜県教育委員会音楽科の指導主事として仕事をしていた頃、県下の小学校教師の多くから「音楽なんて、どうしてもやらなければならないのでしょうか」と、度々尋ねられた。そこで、小学校音楽教育の実態を把握するために、昭和36年「音楽感覚段階別能力表」を岐阜県教育委員会が発行した翌年、昭和37年(1962年)に、全国指導主事会議で岐阜県の『音楽能力表』とそれに準じた『能力テスト(ソノノート)』を紹介した。

すると、テストで測られた児童・生徒の音楽能力が小学校1年生から殆ど変わっていないという事実や、岐阜県の小学校教員採用試験を受ける受験者の9割が、音楽の授業を担当する能力がなかったという事実と直面したと述べている。山本弘はその原因を以下の3つと分析して

いる。

- (1) 教科の基礎になる“音楽能力”が育っていない。
- (2) その“音楽能力”がはっきりせぬので、それを育てる系統も方法もない。
- (3) そのため、子ども一人一人の成長の記録は皆無で、全体での演奏美のみ追求。

そして、その原因を解決するためには、2つが必要だと述べている。

- (1) 育てるべき音楽能力と、その育て方の具体的な系統を明示する。
- (2) 現在の教師の音楽能力で授業が出来る『具体的授業法』の確立。

現行の学習指導要領(音楽編)のあり方では、上記2つを実現させることが困難であるとし、“ふしづくりの音楽教育”を提唱した。

“ふしづくりの音楽教育”では、育てるべき音楽能力を以下のように示している。

- (1)「拍反応力」……どんな音楽にも体で反応し流れを外さない力。資料によっては、「拍の流れに乗る力」とも述べている。
- (2)「模奏唱力」……短いふしならすぐ真似して歌い演奏できたり、前に模奏唱したふしを再び歌い演奏できる力。
- (3)「即興力」……短いふしならすぐ歌い演奏できる力。
- (4)「抽出力」……ふしの中からすぐ階名・リズムを抽出できる力。
- (5)「変奏力」……短いふしをリズムを変えて演奏できる力。
- (6)「記譜力」……聴いたふしを記譜する力。

山本弘は、「これ以外にももっとあるかも知れない」と著書の中で述べている。

上記の中でも、“ふしづくりの音楽教育”では、どんな音楽でも体で反応し流れを外さない力として、拍反応力（「拍の流れに乗る力」として著書に記載されていることがある）をすべての基礎として重視している。

2. 神尾一郎の実践した“ふしづくりの音楽教育”

岡山県に山本弘の“ふしづくりの音楽教育”にとっても感銘を受けた音楽教師がいた。神尾一郎である。昭和40年代に“ふしづくりの音楽教育”にいたく感銘を受けた神尾は、昭和50年代に岡山市立豊小学校において長期に亘り、強力なリーダーシップの元“ふしづくりの音楽教育”を実践した。神尾一郎は、彼の実践した豊小学校の“ふしづくりの音楽教育”を全日本音楽教育研究会誌（J S M E）「音楽教育」No. 65³⁾に次のように掲載した。

新しい音楽学習をめざして —ふしづくりの一本道—

岡山市立豊小学校 神尾一郎

1. はじめに

あの時の感動は、今でも鮮やかに思い出すことができ

る。それは、飛驒の山々に囲まれた静かな町にある古川小学校の授業を参観した時のことであつた。

生き生きと歌い、演奏する子らの目の輝き、それを指揮している子の体から発散している音楽等、今まで見たこともない「子どもが音楽している姿」がそこにあつた。どれをとってみても、自分の担任している子ども達と比べて、何と素晴らしかったことか。指導者によって、こんなにも子どもが違ってくるのかと思つたとき、このままではいけない、何とか、自分も子ども達のために学んでいかなければと強く思つた。と同時に「自分は今まで子ども達に何をしてやったのだろう」という後悔が入り交じって当分、何も手がつかなくなつたことがある。

今をさかのぼること10年ほど前から、同僚とともに研究発表会を目指して「歌唱技能の指導法」について熱心に研究したこと、金管楽器を導入し、クラブ活動に全力を投入したことなどを思い出す。

当時子ども達を見て、技術的には、かなりの程度に達しているが、何か足りない、という考えが頭の中を支配し始めた。

そうした時、山本弘の「音楽教育の診断と体質改善—明治図書刊—⁴⁾」を知り、むさぼるように読んだ。

「何か足りない」という疑問が、誠に鮮やかに解明されていくその道筋に、心底参つた。今まで自分が気づかなかつた音楽教育上の欠陥を、明確に浮かび上がらせ、その対策も具体的に解説してあつた。自分は15年間も教員をしてきて、何故こんなことに気づかなかつたのだろう。子どもに済まないことをしたものだ、という念にかられてしまった。とりわけ、その道筋が、机上の空論ではなく、全て子どもを通した、実験的結果から創り出された結論であるということに魅せられた。

何とかして、それらの学校を見学したいと思うようになり、機会あつて感激の参観が実現したのである。

頭の中では想像はしていたものの、いざ本物を見て驚いた。指導者は音楽を専門に勉強してきた教師ばかりではなく、普通の学級担任である。このことが、また新鮮に写つた。全校の半数のクラスが授業公開をしていた。当時は、古い木造校舎であり、お義理にも立派とは言えないオルガンや打楽器を使って、子どもらは生き生きと自分達の音楽を演奏し続けていた。

このときの感動が、今でも自分の音楽教育への情熱を

燃やし続けてくれている。

その後、数回参観させていただいた。そうした中で、全国各地からの熱心な参観者があるのを知り、更に心強く思うようになった。

2. ふしづくりの教育

古川小学校では、音楽をより楽しくし、ひとり歩きができる能力を培おうとして「ふしづくりの教育」を取り上げて実践していた。

「ふしづくりの教育」といえば、先ず誰もが、その語感から、従来あったような「創作」の領域だけを取り上げた音楽教育だと思われやすいが、これは全くそうではない。結論的には創作にまで発展はするが、学習指導要領の全ての領域（表現・鑑賞）の活動を含んでいる。

教科課程は、単に教材を並べただけのものではなく「ふしづくり」という学習活動をもとにして系統を考えた「ふしづくり一本道」によるものである。ひとりひとりの子どもの能力に即した学習活動ができる。従って、子どもは音楽を楽しみながら学習することができる。

教科課程が、具体的な活動の系統であるため、音楽の教師だけでなく、教師であれば誰にでも指導することができるのである。内容は30段階100ステップから成っている。

「ふしづくり一本道」のねらいは

- ① 聴音の能力を高め模唱力をつけること
- ② 好きなふしを何回でも思い出して表現する力つまり再現力をつけること
- ③ 反射的に反応する鋭敏な感受性を育てることをねらいとした即興力をつけること
- ④ いくつかのふしの中から、最も適したふしを選び出す力、つまり選択力をつけること
- ⑤ 身に付けたいろいろなふしを使いこなす力、つまり活用力をつけることなど、どんな曲にも転移していきける力を主なねらいとしているのである。

授業では「ふしづくり」と並行して教科書の教材も扱う。「ふしづくり」で育てられた力をもって、教材曲を自分のものにしていく、と言った方がいいかもしれない。

低学年では先ず「遊び」を通して、この時期にしか望めない鋭敏なリズム感覚をそだてるようになっている。

音楽の最少単位である♪♪♪のリズムにのせて、友人

の名前を呼び合ったり、しりとりをしたりして楽しく遊べる→（子どもの側からは）遊びが数多く用意されている。

この基本リズムから発展して♪や♪♪、♪♪や♪♪♪を、筋肉を通し、メロディも絡ませながら、体で覚えていくのである。（第10段階まで）

続いて、ふしを作ったり歌ったりしながら「旋律」を中心とした世界に入る。3音+3音を経て7音へ、7音+7音……のように発展していく。

「ハーモニー」の感覚も、旋律と並行して育てられるよう系統的に計画されている。

この学習の特徴は「創る」ことを中心にしてあるので、能力の低い子も高い子も、自分の能力に応じて学習ができるということである。

この点が、教材中心の学習と大きく違っているのである。教材のもっている高い水準に届かない子は、いつも不満の連続である。それなのに主体的になれ、という方が無理だったのである。その道の一部の優れた指導者に育てられた子どもをもって（特に音楽コンクール出場者のような）音楽教育全体のレベルだと誤って判断することは絶対に許されない。小学校の普通の教師が普通の子どもを落ちなく育てることに、真の意味での音楽科教育の発展があるのだと思う。普通の小学校教師が子どもたち全員を音楽的に素晴らしく伸ばさせたいものだ。

「創る」という学習は、児童ひとりひとりが、必ず作業をしなければ成立しない。国語科でいう作文と同じである。そこに責任が生まれ、子どもは活躍の場ができるのである。活躍すれば相応に能力が伸びる。だから、音楽（活動）を好きになるのである。

新学習指導要領ではそれを「愛好心」と表現している。

3. 準備の年

転勤してきた現任校で、いよいよ“ふしづくり”の考え方を取り入れてみることにした。全校で13クラスの小規模校であった。

筆者は、希望して1年生を担当した。同学年の教員と協力し、互いに手探りながら、とりあえず1年生だけで“ふしづくりの音楽教育”の古川小学校の歩みを真似てみた。今から思えば幼稚なことをやっていたのだろうが、当時としては珍しさもあってか、校内の教員から要請さ

れて“ふしづくり”について話しをしたり、授業も公開した。同学年の教員、校長、教頭など強力なバックアップを得て、次第に全教員の理解を得ていった。また、岡山県内で“ふしづくりの音楽教育”を実践している小学校へも参観に行くようになった。

4. 実践の足あと

昭和50年度の新学期から、授業公開を希望する教員から“ふしづくり”の授業を公開していった。そして、その反省の積み重ねを大切にしていっていった。このように豊小学校で音楽の授業を担当している教員全員が、順次授業公開をする計画をたて、研究の第一歩を踏み出した。

低中高学年で学期に1回ずつ研究授業をする。そのうち、各学年部より1名ずつ全校対象の授業をして、全教員の研修資料を提供することなどを決めた。音楽の授業を担当していない教員も音楽科の研修には参加してもらい、側面的な協力も得るようにした。豊小学校のテーマは「音楽的感覚を高める楽しい授業の進め方」とした。

それでは、初期の研修ぶりを振り返ってみたい。

A. 理論研修 4月22日

1. 感動と音楽能力について
2. 音楽の基礎能力とは何か
3. 表現の能力とは何か

B. 実技研修

* 「指あそび」の歌を覚え、“ふしづくり 一本道”の最初から第9段階までの研修 4月22日

* “ふしづくり 一本道”の10～13段階 5月12日

* “ふしづくり 一本道”の14～16段階 5月26日

C. 研究授業 2年 5月21日

ふしづくり 3音のふしをリズム変奏し反射的に階名唱する。(9-40)

教科書教材「バスバス走る」に合うリズム伴奏を工夫する。

★授業の反省点

(1) 各学習への取りかかりに手間取ったが、スムーズに入るためにはどうすればよいか。

ーテーマ曲を作っておき、歌いながら移動や準備をさせてはどうか。例えば「ゆびあそび」を始めるときは

学習活動	指導上の留意点
1. 好きな歌を歌う	・みんなが参加するように
2. ふしづくり ・ゆびあそび ・3音のふしを 変奏する	
3. 「バスバスはしる」 ・リズム伴奏を 工夫する	・2人組(五線への導入) ・グループ単位で拍のりながら 変奏→リズム唱→階名唱と順番 にする
・選ぶ	・歌いながら曲に合う伴奏のリズム を工夫する。学習の順番は掲 示しておき覚えるようにする ・好きなリズムを選んで発表でき るように練習する ・2グループ続けて ・好きなのを全体で ・選ばれたグループはこのリズム 伴奏で歌う
・発表する	
・選ぶ	
・選ばれたリズム 伴奏で歌う	

「子犬のマーチ」の行進曲で場所を移動し、「ゆびあそび」のテーマを歌いながら学習を始める……。

(2) グループの学習方法にも無駄な時間があったが……。

ー①しばらくは4人グループを固定し、座席番号を決めておく。リーダーをNo.1とし、隣に能力の低いNo.2を、そして次は副リーダーともいえるNo.3、もう一人をNo.4として当分はどの学習でもこの順で活動させる。その都度、順番を相談したり、ゆずり合ったりしなくていいようにしよう。

ー②グループ学習の活動手順を徹底しておき、どの児童も勉強の仕方とその内容がわかっておくようにする。画用紙などにそれを書いておく。

例ーリズム伴奏の工夫

1. 歌いながら一人で工夫する。
2. グループで聴き合い、よく合ったのを選ぶ。
3. 楽器を選ぶ。
4. 練習して発表する。(グループ)
5. 好きなリズム伴奏を選ぶ。
6. 選ばれた伴奏を真似る。(選ばれたリズム伴奏で歌う)

各学年、各学習の学習順序を決め、指導者は随時、利用していくようにする。

結局昭和50年月度の研究授業は延べ19名、研修会は15回であった。同僚のアイディアのある授業や、13名もの

参観者を送り込んだ古川小学校の姿を参考にして、研究は少しずつ進み始めた。

3学期の反省会では、次のような意見が出た。

1. 先進校の視察報告がとてもよかった。時間をかけて、もっと詳しく話し合いたい。
2. 1学期は実技研修が多くてよかったが、3学期は理論が多く、しかも進み方が速すぎて理解しにくい点があった。
3. 学習の方法がまだ徹底していないので、いつも未消化のまま過ぎてしまったようだ。
4. 和声に関する学習が取り残された。

昭和51年度（第2年次）

テーマ：音楽的感覚を高め能力を育てる楽しい授業のあり方

進め方：概ね前年度に準ずるが研究授業の回数が多すぎると、低学年担任は教室を留守にしにくくなるので年1回だけに減らすよう話し合った。

教科書教材 もみじ（合唱の工夫）

反省会

(1) 「好きなうた」について

－授業の最初にいつも歌っている。

今までは「本のうた」としていたが、それでは数が限られるし、子どもの意欲の面でも問題が出てきたので「好きなうた」に変更しよう。そしてこの中には、TVのみんなの歌や担任や子どもの愛唱歌なども歌い、レパートリーを増やすようにしよう。

(2) 2部合唱を確かにするには、

－①範唱レコードから低音部の旋律を聴き取る。

歌詞にふしづけしたものを発表しようと予定していたので、校内研修で取り上げた。

できるだけ、ひとりひとりが創り、互いに選び合ってまとめようとしたけれど、まだ能力が十分伸びていないため、実現しなかった。

数名の児童が創ったふしを、他の児童が真似吹きや真似歌いで直し合って、短い旋律を創る程度に終わった。しかし、初めて自分たちの歌を創ったということで、意欲的に取り組み、発表も好評であった。

昭和52・53年度（第3・4年次）

テーマや研修方法は、前年度とほぼ同様であった。

1フレーズのふしが創れるようになった中・高学年では、好きなふしに言葉をつけて歌ってみようという児童の活動が多くなってきた。

そこで、今年から秋の校内音楽会には、児童の創作曲を発表しようということになり、研修内容もそれに関したことが多くなってきた。

創作曲「はだか祭り」は岡山市の音楽会にも参加し、好評を博した。そのときの内面から湧き出てくる迫力と演奏ぶりは、自分たちが創った歌だという喜びと自信からきたのではないかと思う。内容もローカル色豊かなものであったためか、TVのローカル番組や、NHKのニュースセンター9時で放映された。児童たちはそうしたことにも一層の喜びを感じて、音楽に取り組むようになった。一例として、昭和53年度の6年生は「豊小学校音頭」を創り、秋の運動会に全校踊りとして発表した。区民がこぞって踊ったのである。

創作曲の記録

学年	52年度	53年度
1	大きなかぶ	ねずみの嫁入り
2	仲よしありさん	スイミー
3	宇宙たんけん	ブレーメンの音楽隊
4	新田づくり	吉井川の旅
5	合作（はだか祭り）	交通の昔と今
6		ぼくらの四季

5. 個の進歩を見つめて

H君は当時3年生、全ての教科の遅進児であった。音楽でも、友達に比べて歌も歌えないし、鍵盤ハーモニカやリコーダーも殆ど吹けなかった。現在5年生になった彼は、友人と同じように歌や楽器が楽しめるようになった。一斉指導の中では、多分落ちこぼれていたであろうと思われる彼を救ったのは、勿論能力に応じて活躍できる“ふしづくりの音楽教育”によるところが大きいことは言うまでもない。同時に、もう一つ重要なことは担任との関わり合いであったと思う。

担任のT先生は、社会科の得意な若い男先生で、その年も音楽を担当していなかったのであるが、音楽の時間

はいつも子ども達とともに勉強していた。

出張担任と相談して、H君をNさん4人グループへ入れた。Nさんの人柄とリーダーシップを見込んで、友達の教え合い—このクラスの教育方針—によって救おうと考えていたのである。グループ学習のときのNさんを見てみると、実に根気強く教えている。決していやみは言わない。優しく、丁寧に、できるまで世話をする。アンサンブルのときは、彼の力で演奏できるパートを分担させる。彼はこの分担奏から、次第に責任を持って練習を始めるようになり、わずかずつではあるが音楽の喜び、協力の喜びを感じとっていったのではないかと思う。

H君が4年生になったとき、T先生は音楽の授業を生まれて初めて担当することとなった。

T先生は「自分は音楽はわからない。しかし、音楽の授業はできる」をモットーに頑張った。

T先生は、児童が間違っても決してそれを拒否しない。否定語を使わない。静かに他の児童と比べさせたり、レコードを聴かせたりして、児童自身が気づくような手だてをする。そしてH君が、昨日よりも少しでも進歩すると、そのグループを褒める。友達は素直にH君グループの成功を拍手で祝い、Nさんを喜ばせるH君も自分の努力が、先生を通し友達皆に認められたことに自信をもってきた。

この積み重ねが、現在のH君の能力を育ててきたのだと思う。心の通った温かい雰囲気の中で展開されたこのクラスの授業は、筆者自身を含めて、本校の先生たちが今後目指していかなければならない一つの方向であると確信している。

教師の音楽力を伝授する音楽教育ではなく、児童の持つ音楽力を引き出す音楽教育を目指したい。児童が主体になり、児童の世界で活動する教育である。

3. 神尾一郎が昭和54年度に取り組んだ “ふしづくりの音楽教育”

神尾一郎の研究の集大成ともなった昭和54年度に豊小学校の教師たちが取り組んだ研究授業の指導案と授業後に皆でこの研究を深めた「授業反省と問題」を豊小学校が編集した「昭和54年度 音楽研究のあゆみ—楽しい学習の中で能力を育てる—」⁵⁾から抜粋した。

1年生の授業研究（6月21日）

第1学年〇組 音楽科学習指導案 指導者：J〇

1. 題材 ふしづくり うた問答とリレー（2-13）
教 材 おおきなくりのきのしたで

2. 目標 *〇〇〇Vのリズムにのって問答唱したり、リレーしたりする。

*大きなくりの木の下でみんななかよく遊んでいる様子を思い浮かべながら表現を工夫する。

3. 指導計画

歌問答とリレー	大きなくりの木の下で
<ul style="list-style-type: none"> ・頭とり遊び ・しりとり遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌おぼえ ・身体反応の工夫 ・リズム伴奏の工夫 ・合う音づけ

4. 本時案

目標	<ul style="list-style-type: none"> ・しりとり遊びを7音のリズムにのってリレー ・身体反応を通してフレーズを感じ取る
学習活動	指導上の留意点
1. 歌のリクエスト 歌遊び せっせっせっ 2. ふしづくり <ul style="list-style-type: none"> ・頭とり遊び ・しりとり遊び ・友達の発表を聴く 3. 大きなくりの木の下でを歌う <ul style="list-style-type: none"> ・身体反応を工夫する 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて身体反応する ・4人グループで続けさせる ・〇〇〇〇〇〇〇Vのリズムで ・人のよい所を聴き取る ・リズムにのって歌わせる ・各自で工夫した身体反応をしながら歌う ・自分で身体反応が上手くできない児童にはよくできる友達ののまねをさせる ・4人グループで発表させる
<ul style="list-style-type: none"> ・発表する ・好きな身体反応に合わせて歌う 	

《授業反省と問題点》

1. 歌のリクエスト

・選んだ身体反応はいつもそれをしながら歌うことが大切である。

・1年生でもピアノ伴奏は可能である。

2. ふしづくり

- ・しりとり遊びで○○○○○○○○Vのリズムにのってことば遊びをさせたかったが、頭とり遊びで○○○Vのリズムに慣れて、○○○V○○○Vとリズム打ちする児童が多かった。ことばを言うときはリズムを打つことを徹底させたい。
 - ・教師ないしリーダーのカスタネットで規則正しいテンポを示し、しっかり足をまげて休みをとらせるようにしたい。
3. 身体反応の工夫
- ・身体反応を考えているときの教師の助言は、おどりの内容ではなく、やり方についてである。
 - ・グループで選ぶときは各自のおどりを考える時間を最初にとってやる必要がある。
 - ・個人の発表を見て、よいところを見つけさせて選んでいるが、リーダーへの指導も必要である。
4. その他
- ・鍵盤ハーモニカに慣れさせるため、朝の会で既習曲を吹かせている。
 - ・前奏を入れ、指揮者の合図に注目させて、歌いはじめをそろえるよう留意している。

2年生の授業研究（10月16日）

第2学年○組 音楽科学習指導案 指導者：Y O

1. 題材 ふしづくり すきなふしさがし（7-33）
教 材 ジャングルジム
2. 目標 *すきなふしを探し、模奏する。
*曲のイメージに合う表現の工夫をする。
3. 指導計画

歌問答とリレー	大きなくりの木の下で
・全員で好きなふし探し ・グループで好きなふし探し	・歌覚え ・リズム唱、手拍子 ・身体反応、リズム伴奏、合う音づけ

4. 本時案

目標	<ul style="list-style-type: none"> ・好きなふしを探し、模奏することができる ・リズム感、フレーズ感を育てる 	
	学習活動	指導上の留意点
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歌のリクエスト 2. ふしづくり <ul style="list-style-type: none"> ・○○○Vのふしをリズムかえする ・グループで選んでまねぶきをする 3. ジャングルジム <ul style="list-style-type: none"> ・4つのコーナーを回って練習する <ul style="list-style-type: none"> ・発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ・指揮を見て歌う楽しさを身に付けさせる ・駆け足リズムかスキップリズムかを決めてから創らせる ・全員できるまで練習させる ・グループごとにどのコーナーから回るか決めさせておく ・オルガンの合図で代わり、4つのコーナーを経験させる

《授業反省と問題点》

1. 歌のリクエスト
 - ・指揮を見て歌う意識が低い。理由として歌い方の工夫や指揮の工夫ができていないのではないか。低学年からもっと歌い方の工夫のところで極端なほど強弱の違いを経験させる必要がある。また、身体表現を指揮に発展させるためにはフレーズ毎に踊りを変えたり拍を感じた動きさせるといった音楽的表現を意識させるように心がけておきたい。また、真似したくなるような指揮のVTRも必要である。
2. ふしづくり
 - ・グループでの発表のとき○○○Vのリズムに乗って、遅れないようにリレーでさせているが、速くなったり、つまったりするグループがでてくる。そのグループはきまって足でリズムをとっていない児童がいる。上手くできるグループの発表を見て、その秘密を探らせると「みんな膝を曲げている」という。低学年では特に拍を足で感じながら、鍵盤ハーモニカを演奏させたい。
 - ・耳で聴いた意見を多く言わせたい。
3. コーナー学習
 - ・コーナー学習を意欲的に取り組ませるために個人学習記録カードを持たせたい。
 - ・フレーズの捉え方が児童によって違っていたので、散

歩コーナーでとまどっていた児童がいた。グループで「どう歩くか」相談する時間を持つ必要がある。

3年生の授業研究（11月14日）

第3学年〇組 音楽科学習指導案 指導者：UO

1. 題材 ふしづくり 7音のフレーズへの移行 (12-48)

教材 まいごのこひつじ

2. 目標 * 3音+3音から7音のふしを即興的に作ることができる。

* 短調の感覚を育てる。曲趣を活かして輪唱する。

3. 指導計画

7音のフレーズへの移行	まいごのこひつじ
1. 3音の続く、終わるふしを結んでフレーズづくり	1. 歌覚えと計画 2. 鍵盤ハーモニカ奏
2. 3音と7音のふしづくり	3. 輪唱の工夫
3. 7音の模唱奏とリレー	

4. 本時案

学習活動	指導上の留意点
<p>目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3音や7音ほしを拍にのりながら創る ・ 響き合いを感じながら輪唱の工夫をする 	
<p>1. 補助教材を歌う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しいね ・ もみじ <p>2. ふしづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2人組でふしを創る <p>・ まねぶきする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 記譜する ・ 発表する <p>・ 選んだふしのまねぶきをする</p> <p>3. まいごのこひつじ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 斉唱奏する <p>・ 輪唱の工夫をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 選ばれたもので輪唱する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 曲のイメージを思い浮かべながら歌わせる ・ 7音で創れない児童には3音で創らせてつなげる (O OOV OOOV OOOO OOO O Vのように) ・ まねぶきの力が足りない児童には3音+3音だけを頑張らせて吹かせたい ・ はやくできた児童にはかな記譜させる ・ 友達のふしの中から好きなふしを見つける ・ 情景を想像しながら歌わせ、短調の響きを感じ取らせたい ・ 極端にむきになって輪唱しない ・ イメージを思い浮かべながら輪唱させる

《授業反省と問題点》

1. グループでの練習を全員うちこんでさせるために
 - ・ 時間や内容をできるだけ短く限ってさせる。
 - ・ 合図があるまで止めないで練習させる。
 - ・ 一定時間練習したら合図し、発表できるかどうかテストする時間を設ける。それに合格した班が発表を得る。
 - ・ 発表の3回分が間違わずに吹けたら大丈夫という目安をもたせる。
2. 輪唱の工夫のやり方について
 - ・ 今まででは歌で響き合いを比べていたが、声のバランスがとれていなかったり、つられたりして聴き取りにくく後で鍵盤ハーモニカで二つの音の響き合いを比べさせる場合が多かった。そこで能率的に工夫させるため、今回はまず鍵盤ハーモニカで聞き比べさせてから歌に入った。どの組も同じ結果になり、聴き取りやすかったようだ。
 - ・ 鍵盤ハーモニカが児童に吹けない輪楽曲は、教師が前もって録音しておく。
 - ・ 輪唱に一生懸命になるとだんだん声を張り上げるようになる。
 - ・ 本当に上手い輪唱は小さな声でもつられないで続けられることを教える必要がある。
 - ・ つられないためには平素から独唱をさせて正確に歌えるようにさせておくことが大切。
 - ・ 平素から範唱をしっかり聴いて、綺麗な声で歌えるようにしておく。

4年生の授業研究（9月27日）

第4学年〇組 音楽科学習指導案 指導者：IO

1. 題材 ふしづくり 7音のふしを で記譜 (17-62)
教材 風のワルツ

2. 目標 * 自分で創ったり、聴いたりした7音のふしを で記譜することができる。
* 曲趣を活かして創造的に表現しようとする態度を育てる。

3. 指導計画

7音のフレーズへの移行	風のワルツ
1. 7音のふしを のリズムで記譜する	1. 歌覚えと学習計画 2. 歌い方の工夫 3. かざりのふしを工夫

4. 本時案

目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7音のふしの記譜ができるようにする ・ 風のワルツの旋律に合うかざりのふしを探して演奏する
学習活動	指導上の留意点
1. 既習曲を歌う 2. ふしづくり ・ 7音のふしのリレー 3. 風のワルツ ・ かざりのふしを工夫する ・ 練習する ・ グループごとに発表し聴き合う	<ul style="list-style-type: none"> ・ イメージに合った歌い方をさせる ・ 4人で7音のふしのリレーをする ・ 各自まねぶきをし階名唱をしながら記譜するように指示する ・ 演奏する児童はまとめの記譜まで演奏を続けるようにさせる ・ かざりのふしのリズムを示す ・ グループで聴き合いながら工夫させる ・ はやくできたグループには終わり方も工夫させる ・ 工夫したところを話し合わせ好きなグループを選ばせる

《授業反省と問題点》

○授業反省

かざりのふしをつける学習は、この授業が2回目であり、まだふしを入れるのがやっとできる程度である。そのため、かざりのふしをつける箇所を第2フレーズのところだけに限定し、ふしをつけるのは自由にやらせた。

かざりのふしのリズム変えができるようなれば、もっと楽しいものになると思う。

記譜に時間がかかるので、はやく記譜するにはどんな方法ですればよいのだろうか。

○話し合い

1. ふしづくりについて

- ・ 記譜はまねぶきと同じ速さで行われたが、ゆっくりと1分間に30位にするとよく書き取れたのではないか。音符を塗りつぶしていたのでは時間がかかって困るので略した書き方をすればよい。
- ・ 問題を出す児童にゆっくりとふしを吹かせるとよい。
- ・ どの学年でも常に膝を意識させておくべきで、ものに

寄りかかって吹くことは避けたい。

- ・ 曲のイメージによって歌い方の工夫の段階で、縦揺れ、横揺れを工夫すべきである。低学年から体で覚えさせ動き方の工夫を積み重ねておくとうい。

2. 「風のワルツ」について

- ・ 前時でのリズムで、かざりのふしを入れるように指示していたので、2音か3音きちんとふしを入れることができた。曲の終わり方も最後の発表の組がドドドと工夫していた。
- ・ 2組ずつ発表したのので、比較しやすく、意見の発表もよくできていた。

3. かざりのふしについて

- ・ 4年の段階でかざりのふしを入れるのは、すこし難しかったのではないか。まず、同じ音を入れさせることから始めていくのがよいのでは。
- ・ 4年では、まず、いろいろなかざりのふしのついた曲を聴かせてから、かざりのふしを工夫させるとよい。
- ・ かざりのふしは、次のメロディの直前につけたり、また、最後のふしからつけるという方法もある。

6年生の授業研究(10月9日)

第6学年A組 音楽科学習指導案 指導者：神尾一郎

1. 題材 ・ふしづくり 短調のふしづくり

・教材 口ぶえふいて

2. 目標 ・短調で一部形式のふしが創れる能力を育てる

- ・ イメージに合う表現の工夫が豊かにできるようにする

3. 指導計画

短調のふしづくり	口ぶえふいて
<ul style="list-style-type: none"> ・ 短調の旋律の模唱奏 ・ 長調の旋律を創って同主短調づくり ・ 短調のふしづくり ・ 短調のふしに伴奏づけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌覚え ・ 歌い方の工夫 ・ 鍵盤ハーモニカ奏 ・ 間奏づくり ・ 和音探し ・ 和音伴奏の工夫 ・ アンサンブルの工夫

4. 本時案

目標	学習活動		指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・長調の1フレーズのふしを同主短調に創り直すことができる ・曲に合う和音を聴き合いながら探すことができる 			
1. 既習曲を歌う			<ul style="list-style-type: none"> ・選ばれた間奏と希望者で工夫したリズム伴奏をつけて歌わせる ・指揮者のイメージに合わせてよう工夫させる
2 ふしづくり			
<ul style="list-style-type: none"> ・同主短調のふしを創る ・選ぶ 			<ul style="list-style-type: none"> ・創ってきた7音+7音のふしのみとらを半音下げて創らせる ・4人グループ内で発表し合って、好きなふしを選び、まね吹ぶきをさせる ・好きなふしが決まっても難しくまね吹きできそうにない場合は他の人のふしを選んでよいとする
3. 口ぶえふいて			
<ul style="list-style-type: none"> ・和音さがしをする 			<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜にコードネームC, F, Gを書きながら探らせる ・はやくできたグループへは合う音や和音のリズム変奏などを工夫して曲のイメージをより豊に表せるようにする ・工夫された点を次時に活かせるような聴き方を促す
<ul style="list-style-type: none"> ・発表する 			

《授業反省の記録》

1. 特に留意していること

(授業の中で)

- ①椅子やオルガンにもたれて鍵盤ハーモニカを演奏することをやめさせたい。
- ②無駄な動きのないグループ活動のさせ方
- ③友達の演奏発表には自分の意見・間奏が持てるように(授業の外で)
- ④朝の会・終わりの会で毎日、必ず歌う。司会の日直当番と前日打合せをしておく(演奏・指揮・伴奏等決めておく)
- ⑤音楽も他教科と同様に宿題を課している。
(例)

- ・7音+7音の長調のふしを好きなリズムで創ること。
- ・「歌覚え」の授業中に覚えきれなかった部分を覚えておくこと。
- ・「口ぶえふいて」の主旋律の写譜

2. 問題点と処置

- ①4人グループ単位では能力のバランスがとれているが8人グループ単位で較べると能力差が目立った。(和音さがし)そこで、この教材の学習が一区切りついたとき、他の4人グループと組み合わせて新しく編成し直した。
- ②特定の児童の創ったふしが片寄って選ばれる傾向が見られ出したことへの対策はどうすればよいか。
クラスでただ一つの作品を決めるために選ぶようなときは仕方がないが、通常の場合は「まだ選ばれていない人」からも選んでいくような考え方を指導していったらどうか。
- 3その他
- ①7音+7音の長調のふしを事前に創っていたために同主短調づくりへすぐ入れた。
- ②昼の休憩時間にリズム伴奏をつけて練習していた。
- ③男女が教え合って仲良くやっていた。
- ④(質問)入門期の鍵盤ハーモニカの導入の仕方はどうしたらよいか。

注

- 1) 山本弘 大正6年(1917年)東京生まれ、岐阜県師範学校卒業後、益田群下呂小学校、高山市大八中学校などを経て岐阜県教育委員会指導主事、吉城郡角川小学校長、高山教育事務所学校職員課長などを歴任、昭和52年(1977年)文部大臣表彰、昭和52年(1977年)度全国唱歌ラジオコンクール高等学校の部 課題曲:《若き神々の歌》の旋律を作曲。
- 2) 神尾一郎 昭和30年(1955年)岡山大学教育学部卒業、岡山県岡山市の国公立小学校音楽教師、岡山市立豊小学校において“ふしづくりの音楽教育”を実践。後、岡山県岡山市立小学校の教頭、校長を歴任。
- 3) 全日本音楽教育研究会(J SME)が発行する研究会誌
- 4) 山本弘 『音楽教育の診断と体質改善』明治図書

(1971)

- 5) 「昭和54年度音楽研究のあゆみ—楽しい学習の中で
能力を育てる—」岡山市立豊小学校 (1980)

